

編集委員会便り

この編集後記は平成と年号が改められた所で締切に追われて書いている。先天皇のご冥福を衷心からお祈り申し上げる。筆者は戦前派という部類には属しないが、開戦の放送、終戦の玉音放送などはハッキリと記憶している。やはり、昭和は激動の時代だったと云えるのであろう。米軍が来るまでに若い女は墨で顔を塗って山中に潜むのが良いといった話が実しやかに村の中をまわったこともあった。金属類供出とか「ガソリンの一滴は血の一滴」の戦中スローガン、墨を塗った教科書など断片的に思い出される。戦後の混乱は無いではなかったが、国鉄等の交通システムも動いていたし、整然と戦後復興への転換が進んだのではなかろうか。栄養失調で苦しむ人が居る一方、稲干場から稲が盗まれるといったことが少ないのは子供心にも不思議に感じられた。

それから約40年、手中にあるエネルギーも資源も潤沢になったが、人類は自らの排出物で地球を汚染し自然環境の破損も無視できない程になって来た。エネルギーや資源は自然から略取するものでなく、賢明に節度を持って使用すべきものとなって来ている。当誌「エネルギー・資源」の意義と重要性は、この意味で増すことはあっても減ることがない。タイム誌の新年号表紙の名物「時の人」が、個人ではなくて病める地球となっているのは的確な選定であろう。

編集委員会は隔月、林委員長、若松副委員長以下、毎回20名程度の編集実行委員が集合して行われる。学界委員の方々は論文査読会議もあるのでなかなか大変

である。3月号は核エネルギー利用技術特集の設定で原子力発電で関連が強いからと、電力分野の私に編集委員会便りが割当てられたが、快く執筆頂いた筆者の皆さんと機敏に動かれる事務局にお礼を申し上げることに尽きる。「エネルギー・資源」という組織と雑誌名の選定はいかな経緯で決まったのであろうか。実に適切であるが、一人の編集実行委員としての眼から見ると森羅万象がその中に入ってしまうと思える程懐が広い。雑誌の内容を維持する為にも会員全員の協力が必要だと通感し、お願いする次第である。

年末ということもあるが、事務局が用意された議案と参考資料も32頁もの大部に達した。林委員長の軽妙な主導で3月号の最後の詰め、5、7月号の内容の詰めが進む。9、11月号の計画も概観し、長期的な雑誌の構成方向などの論議も加われば、冬の日は早速に暮れなずむところかトッブリと暮れてしまうことになる。

恒例の年末年忘れ会は京町堀の「宇津房」で行われたが、時節柄やや静かだが、その分話が盛り上がった感じで、キリ上げ時期に上野事務長がヤキモキする場面もありました。

街に行く若者達は、服装もよく、苦勞も知らなげです。外面的な幸福感だけでなく、内面的なエネルギーを是非保持して欲しいと云ったら書き過ぎでしょうか。

末 定 泰 彦

関西電力㈱研究開発部調査役

